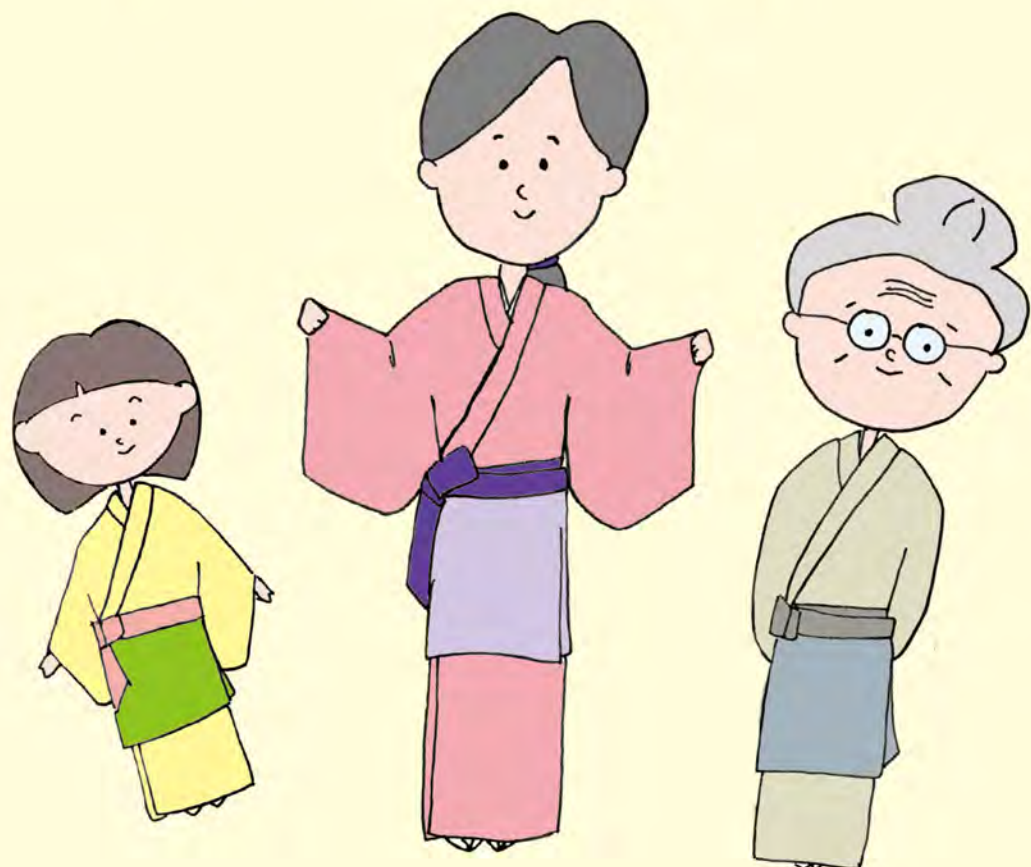


こはな おび 木の花帯

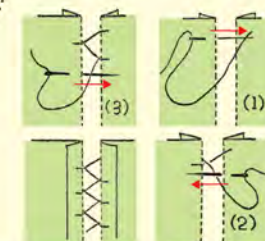
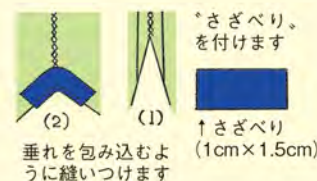


着物に合わせて帯や垂れを組み合わせます（帯の幅は約7寸）

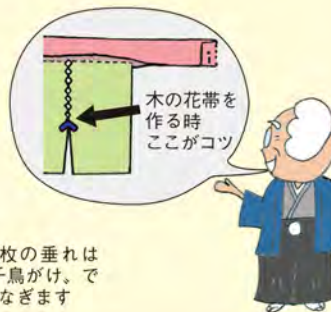
帯と垂れを付け替えて
木の花帯は、帯や垂れの組み合わせで、祝いの席や弔事など、さまざまな場面で使い分けられます。垂れは、和服地に限らず、洋服地でも作れますので、着物に合わせて色合いを楽しみましょう。

帯や垂れは天声社亀岡本店で販売しています

亀岡宣教センター みろく会館1階
TEL 0771 (24) 7523
URL <http://www.tenseisha.co.jp/>



3枚の垂れは「千鳥がけ」でつなぎます



木の花帯の良さを生かして

三幅前掛は、平安時代に君子に仕える女官が付けたのが始まりです。そのことから、三代教主は、祭典で神さまに仕える衣装として大変ふさわしいと考えていました。

また、木の花帯が個々の感性で工夫して作られ、普及していくことをうれしく思うとともに、着用時には美しく締めてほしいと願っています。

祭典に、晴れ着に、普段着にと、使い分けられる木の花帯。たまには和服に身を包み、木の花帯をきれいに結んで、町を歩いてみてはいかがでしょうか。

正月、着物の晴れ着姿の女性がいると、辺りは華やきますね。その華麗さを演出している一つに「帯」があります。帯は本来、腰に巻いて衣類の前開きを防ぐための服飾品です。

女性用の帯には、丸帯、袋帯、名古屋帯などがあり、さまざまな結び方をします。

実は、大本にもオリジナルの帯があります。今回は、その「木の花帯」を紹介いたします。



みろく博士

大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
〒623-0036
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>

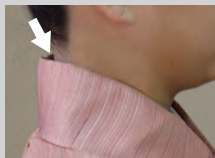




着付けのポイント



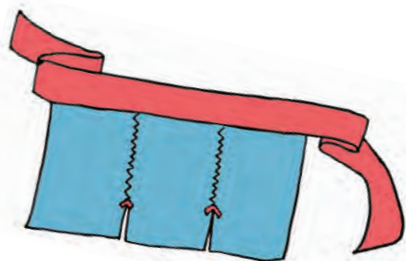
長じゅばんの襟は5センチほど出します



衣紋(えもん)は抜かず、詰めて着付けます

木の花帯の結び方

夏は涼しく、冬は温かいといわれる木の花帯。ポイントさえつかめば手軽に着用できます。結び方の一例を紹介します。



蝶結びにして出来上がり！垂れの長さは膝頭にかかる程度に仕立てると美しく見えます



左手に持っている帯をへそが中心にくる高さに巻きます



その上に右側の帯を重ねます



右腰の上あたりで両帯を結びます



帯を後ろへ回し、左右の帯を持ち換え、交差します



木の花帯は腰骨の位置で着けます。3枚付いた垂れのうち、右端の垂れが付いた帯の左右を持ち、垂れの中心と体の中心を合わせます

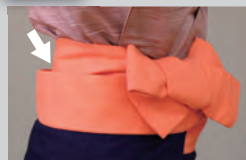
代表的な結び方を紹介します



- ① 文庫結び
- ② 蝶結び
- ③ 片結び



仕上げのポイント



垂れの付いた部分の帯はゆったりと締めます



帯の間から着物が見えないように気を付けましょう



着物は背中心が真っすぐ通るように着ます



垂れの縫い目が背中心とそろわなくても構いませませんが、縫い目は真っすぐになるように気を付けましょう



平安時代末期から昭和中期まで、京の都には、「大原女」や「白川女」と呼ばれる女性がいました。「大原女」は薪や柴を、「白川女」は花を町で売り歩いていました。彼女たちは、頭に日本手拭いを姉さんかぶりし、腰には三幅前掛を締め、京都らしい穏やかな風情を醸し出していました。

出口直日三代教主(1902-1990)は若いころ、京都で大原女や白川女に出会い、その素朴な美しさに好感を持ちました。そして30代で農業に携わってから、三幅前掛を付けるようになりました。

京の町に伝わる女性用の帯



三幅前掛の基本形は、垂れが脛まであり、帯は体の前で結びます。三代教主は、三幅前掛を実用性と優美さを兼ね備えた帯に改良し、「木の花帯」を創案しました。

木の花帯は、袋帯に比べて軽量で結び方も簡単です。さらに、夏は涼しく冬は防寒の役割を果たすことから、三代教主は、日常生活や外出にも好んで着用していました。

昭和30年ごろ、大本の機関誌で紹介されてから、大本信徒の間でも木の花帯が広まりました。日常以外にも、女性が祭典に仕える時の装束として用いられています。

三幅前掛をアレンジして

建礼門院と三幅前掛



平安時代末期、平清盛の娘である平徳子は、16歳で高倉天皇のきさきになりました。22歳で天皇の御子を生み、3年後、その皇子が安徳天皇として即位したことから、「建礼門院」の院号を賜りました。

建礼門院が29歳の時、夫・高倉上皇と父・平清盛が相次いで亡くなり、平家が栄えた時代は一変。源氏に撃破され、勢力の弱まった平家一門は西国に逃れます。山口県下関市の壇ノ浦にたどり着いたところで源氏の追っ手に破れ(壇ノ浦の戦い)、平家一門とともに、建礼門院は海に投身しました。

しかし、源氏の兵士に保護された建礼門院は、京の都に戻って出家し、寂光院(京都市大原)にこもります。そして、高倉上皇や安徳天皇らを弔い、生涯を終えました。

ここに仕えた女官が、はかまの略式として三幅前掛を作りました。